

「地域学」の内容とその学びに関する一考察

西村 千尋
山田 千香子
吉居 秀樹

1. はじめに

本論は地域政策学科の根幹科目といえる「地域学」について、そのとらえ方、内容の展開、教育の方法等について検討を加え、その学びの発展的可能性について考察していく。初年次教育や専門演習において、学生にいかに関心への関心を促し、どのように地域を捉える視点を養っていくかについての方法論のこれまでの試みを述べるものである。

2. 本学における「地域政策学科」の設置背景と「地域学」

まず、本学における「地域学」設置の背景について述べていきたい。地域政策学科が設置され、「地域学」⁽¹⁾が科目に置かれた背景には、情報化、グローバル化が進展する現代社会、つまり、近年のデジタル化された情報通信技術の発達や、広域経済の進展、あるいは地域統合の深まりのなかにおいて、改めて価値の多様化や、それとともに歴史認識の相対化が求められてきた状況がある。「地域政策」「地域づくり」「地域活性化」という視点には、グローバル化とローカリティとの関連を考察することが重要性を持つと考えられ、ローカリティの形成には他の地域と比較した上での妥当性が求められる。そのポイントとなっているのは地域の暮らし、地域生活

の学術的把握であり文化的資源（その土地らしさ・その土地固有の特徴を形成するもの・地域の伝統等）や経済的資源の質や量などである。住民の帰属感は地域の固有性をベースに構成される。それらはこれまで経済学が無視してきた領域であり、非経済学的価値とされるものである。

グローバル化が求める普遍性の中で地域社会が埋没することなく、地域社会の自立性・独自性を維持する為には、地域の文化的資源の再確認と価値付け、そして、価値付けされた文化的資源の地域社会への還元が求められる。地域資源としての意味づけや価値付けは、大学に求められる学術的役割であり、大学の地域貢献として果たしうるものである⁽²⁾。

ここでは、地域学を「一つの地域という共通項を媒介に、地域社会、経済、歴史、環境、人々の暮らしや生活体験をまとめて研究し、自然と産業と暮らしの関係が総合的に解明され、当面する問題をトータルに究明していこうとするもの」と捉えておきたい。

具体的には、(一事例として) 平戸、長崎県北という地域をまず取り上げ、異なった専門領域からともに研究を行い、そこから地域の姿を明らかにする方法が考えられる。(1)その地域の環境・立地条件を概観し、(2)その地域に存在している人々の暮らし、産業、経済活動、情報、さらにはエネルギーといった一口に「資源」と呼びうるものを把握して、その活用法を考える。その場合、その地域における歴史、とくに社会・経済や文化・民俗といった側面の歴史に注目し目配りをするのが欠かせない事項である。

3. 地域学に取り組むにあたって

(1) 必要な取り組みと学びの流れ

地域学を進めるにあたって、欠かせない視点は地域住民の Quality of Life (以下 QOL と呼ぶ) である。地域住民がいかに生き生き生活しているかを重視するのが特徴である。そのためには、既存の単独の専門領域でから

のアプローチのみでは、現代の地域社会が抱える問題群（例えば、環境問題や少子高齢化社会における健康問題や教育問題）の本質の基本認識や問題解決のためには不十分と考えられ、専門領域の異なる教員の参加、専門領域横断的分析方法ないし考察方法が求められる。「地域づくり」または「まちづくり」という視点から、「QOL」を基本理念として措定した上で、QOLの向上を柱とした「地域づくり」へ向けての具体的指針ないし方策を提示することを目標とし、地域社会の基礎的データを収集し、解析するという方法が考えだされた。その過程として、文献調査、現地調査、理論モデルの構築、そして深い内省という社会科学の一般的な研究方法があげられる。学生の実践への応用としては、文献調査（先行研究・予備調査）、現地調査（データ収集・フィールドワーク）、理論構築（分析・報告書の作成）、深い内省（現地での報告会・評価）等のステップがあげられる。

地域学に必要な取り組みを表1に示す。二次資料などを用いた文献研究だけでなく、一次資料収集を目的としたフィールドワークを必要とする。地域住民のQOLを考える場合、ある一場面のみを切り取るのではなく全人的な視点から、地域住民を取り巻く分野の連携が欠かせない。それが研究分野を超えた連携である。最後に、地域課題に抽出や解決に向けての提言、さらにその評価において必要なものが事実証拠に基づく政策と実践である。

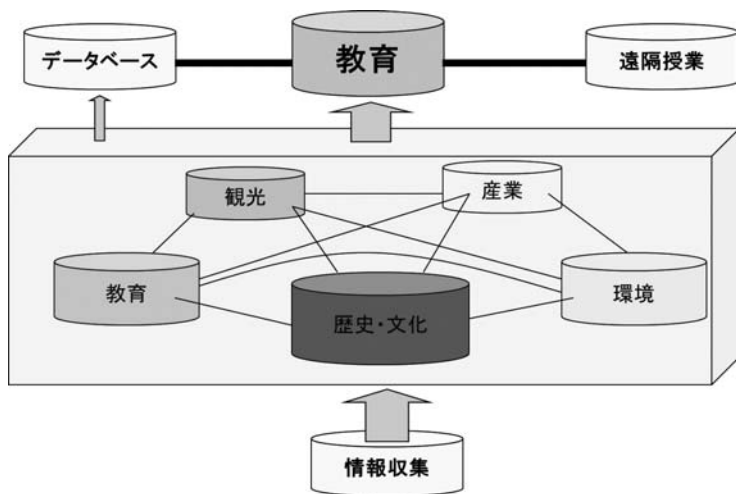
表1. 地域学を進めるにあたって必要な取り組み

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">➤ field work（現地調査・実地調査・巡検）➤ trans-scientific approach（研究分野を超えた連携）➤ evidence-based policy and practice（事実証拠に基づく政策と実践） |
|--|

以上のことをまとめたのが図1に示す概念図である。図の下部で示すように、まずは地域情報の収集から始まる。その視点は、図の中部で地域住民を取り巻く分野（ここでは5分野）の連携が必要であることを示している。そこで得られたデータの分析を行い、情報発信のための教材化を図り、ひとづくりに活用することを図の上部で示している。ここでは教材を電子

化することによりデータベースに保存することを提示している。この考え方は公文書管理法（平成二十一年七月一日法律第六十六号）における歴史公文書等の保存、利用等にも通じるものである。また、このような取り組みは、情報化社会あるいは知識基盤社会において有用な手段であり、特に長崎県のように離島をかかえる地域では遠隔授業において活用することを念頭に置いている。

図1. 地域学の概念図



(2) 初年次において勧める図書

以上のことをふまえ、著者らは地域学を学ぶ新生入生に薦める書籍について検討を行ってきた。その結果、以下に書籍を示しその内容と選書理由について紹介をして行きたい。これらの書籍は、上記に示した「図1. 地域学の概念図」に対応している。まず、はじめに、情報化についての理解が求められることから、次の二冊があげられる。

1) 情報化の視点から

①金子郁容著『ボランティア—もうひとつの情報社会』岩波新書 1992年

選書理由：

「地域」が含まれる現代社会を理解するには、それを特徴付ける「情報社会」という側面を理解しておくことが必要である。本書は、この情報社会を新たな情報ネットワーク論で解明しようとするものである。それは、巨大なシステムとして存在する現代社会及びその中の組織にあって、個々に分離された存在になっている個人であっても、自ら積極的に行動する事によって生み出される「動的情報」によって、それが新しいネットワークを形成することによって、社会や組織を活性化させ、さらに新たな社会を創り出す可能性のあることを、ボランティアという具体的例を挙げて解明している。この領域の基本書であると言えることができる。

②川喜多二郎『発想法』中公新書1967年

選書理由：

インターネットの情報があふれる現代においては、過剰ともいえる情報をいかに整理するかが重要な課題である。しかし、第二次情報ではなく、人間が生きている現場からデータを収集するという情報の原点に戻って考えることはさらに重要といえる。現場での発想を学問にしていく具体的方法である KJ 法が提案されている。現在では多くの研修セミナー等で使われている方法であるが、新鮮な視点をもたらしてくれる。

2) 人間および文化・社会の理解という視点から

①宮本常一『民俗学の旅』講談社学術文庫 1993年

選書理由：

人文・社会的な知とは、社会の仕組みや変化を批判的に理解してい

く営みである。社会を見る目は、先行する知の蓄積をふまえつつ、自前で養っていかなければいけない。その意味でこの文献は、現代日本の民俗学者のすぐれた自伝であると同時に、いかに「社会を見る目」を養うかを示す良い実例となっている。

②中根千枝『タテ社会の人間関係』講談社現代新書 1967年

選書理由：

社会における、深層の人間関係を規定する社会構造をタテ社会（日本）、ヨコ社会（西欧）という概念を最初に提示した古典的な本である。初版本は昭和42年であるが、今でも現代の日本社会に当てはまる内容であり、日本社会における普遍的な構造を捉えた本と言える。日本社会の人間関係は、個人主義・契約精神の根づいた欧米とは、大きな相違をみせ、「場」を強調し「ウチ」「ソト」を強く意識する日本の社会構造にはどのような条件が考えられるか。自らの社会を客観的に捉える視点を提供している。

3) 環境理解という視点から産業へ

松永勝彦『森が消えれば海も死ぬ（第2版）－陸と海を結ぶ生態学』
講談社ブルーバックス 2010年

選書理由：

著者の松永克彦氏は、専門領域の化学の研究の視点から、1993年の第1版において、長崎県だけでなく日本国にとっても欠かすことのできない「水産資源の確保」のためには「海の環境保全」が必要なこと、そしてそのためには「森林の保全」が必要不可欠であることを、地球レベルと沿岸海域の両方において明らかにした。これは地球温暖化にたいする対策への考え方も含むものである。これらのことは、今や、「常識」となり、既に各地で積極的な取組が始まっている。その成果を踏まえて新しい知見、情報を加え、改訂されたのが本書である。環

境問題を「生態系」として捉え、そしてそのことが、「産業政策」へも繋がることを示しており、「地域学」における研究・教育と政策（実践）とを考える視点を提供している。

4) 観光の視点から産業へ

河村英和『観光大国スイスの誕生—「辺境」から「崇高なる美の国」へ』
平凡社新書 2013年

選書理由：

ホテル建築史が専門である著者は、イタリアのホテル研究史のために15年にわたってスイスへ資料収集のため足を運んでいる。著者によると、17～18世紀に英国貴族の間で流行したグランド・ツアーにおいて、スイスといえば最終目的地であるイタリアへの通過点に過ぎず、不便で命の危険が伴う山越えの街道でもあった。しかし、ルソーの自然賛美やカントらの美学理論といった新たな思想潮流が誕生すると、それまで恐怖と隣り合わせだった自然景観が崇拜の対象へと変化していく。氷河や山岳に「愛でべき美」が見出され、スイスはヨーロッパ中の知識人や芸術家が集い交流の一大拠点へと変貌する。さらに、イタリアとスイスの共通点として、どちらも結核療養地として発展した経緯も持ち合わせる。そのような状況を背景に、スイスの観光は発展し、現在では主要産業のひとつとなっている。地域づくりの一手法として活用されているエコツーリズムを学ぶにおいて、地元学を基盤に観光に活用し、産業として確立する術を学ぶべき姿が本書には盛り込まれている点が選書の理由である。

5) 総合的な視点と方法—地域政策学科の具体的学びの方法を示す内容として

①山本紀夫『ジャガイモのきた道—文明・飢饉・戦争』岩波新書 2008年

選書理由：

本書の内容から、著者は、農学部生物学の研究から出発して文化人類学へとその研究領域を拡張してきたことがわかる。穀類のみが文明を形成できるとの当時の通説に対して、アンデス原産のジャガイモが文明を形成してきたこと、そして飢饉や戦争と関わりながら人類を救う形で世界へ広まってきたことを内容としたものである。文献調査、現地調査、理論モデルそして深い内省という社会科学のオーソドックスな研究方法がすべて盛り込まれている点で、地域研究の入門書として有益な書といえる。

②石城謙吉『森林と人間－ある都市近郊林の物語－』岩波新書 2008年
選書理由：

石城謙吉氏は、イワナの研究者であるが、林学・林業中心の実験の場と考えられてきた大学の演習林の責任者となった。異なった領域の研究者が、複雑な自然現象を、自然の場で、観察調査し、基礎データを収集蓄積するようにし、それを現代科学のレベルで体系的に把握すること（これをフィールド・サイエンスと呼ぶ）を目指して、演習林を再構築してきた取り組みを紹介している。さらには、副題にも示されているように、演習林を研究の場としてだけでなく、市民の学習や憩いの場としても構築していくという、現代における「まちづくり」にも通じる取り組みも同時に行ってきた内容になっており、地域学の内容を理解する上での良書である。

3. まとめ

地域学は、地域住民が地域を見直し、誇りを持ち、自らのQOLを向上することにつながる。例えば、地域づくりにエコツーリズムの手法を用いて取り組む場合でも、地域のつながりの再構築が期待できる。これまでの歴史・文化、環境、産業と個別に進められてきた施策が地域の生活におい

て意味をもたないのは、地域住民の生活ではそれらが統合されたものであることが理由である。つまり、科学により細分化された知を、研究分野を超えたアプローチにより統合化することが必要である。著者らが2000年より取り組んできた「人間科学セミナー」もそれを目指し取り組んできたものであり、2005年の地域政策学科設立の基礎となった。このように、地域学は、人間の生活とそれを取り囲む諸要素とのつながりの再構築を試みようとするものである。

(註)

- (1) 本学において既に開講され「地域学」に該当する科目としては「長崎県の歴史と文化」「長崎県北の歴史と文化－平戸・西海学Ⅰ」「平戸・西海学Ⅱ－佐世保の近代」「長崎経済論」「地域研究－離島」等がある。
- (2) 山田千香子・吉居秀樹「長崎県立大学における地域学「長崎県北の歴史と文化－平戸・西海学」開講の経緯とその意義について」『長崎県立大学論集』42・4、2010年3月、177-208